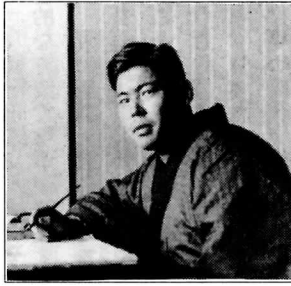


熊本・徳永直の会会報

第42号

徳永直の作品を読もう

二十一世紀の展望のために



二十世紀は確かに戦争の百年間であった。人類が戦争から解放される第一歩の百年に二十一世紀はならねばならぬ。戦争からの解放、それは国家の壁が壊されることから始まるであろう。二十一世紀早々の今日、国家という怪物は常に戦争を想定している。国家は人類個々の友情を破壊する。二十世紀において我々は、そのことをいやというほど見せつけられてきた。未来の予見は過去の事実の認識にかかわる。

徳永直という、過去の事実を我々に提供してくれる身近な作家がいる。彼の家は貧しかった。何が故に貧しいのかと思うようになった。米村鉄三という得難い友人との出会いも幸いした。彼は労働運動に目覚めた。特攻がすぐ目を付けた。彼は熊本から追われた。東京の一大印刷会社で労組幹部を務めた。そして首切られた。「太陽のない街」が世に出た。日本プロレタリア文学の潮流が、それを生

み出した。作家徳永直は書いた。書いているうちに戦争の季節となった。苦悶の日々がやってきた。しかし彼を救ったのは、彼の幼少期の労働であった。戦争の日本国家は、彼を「満洲」に派遣し、「先遣隊」を書かせた。戦争遂行の国策の糧にする国家の意図であったが、必ずしもこの作品はそれを満足させなかった。同名の単行本には、その時の紀行文も並んでいるが、そこには人間が人間を見る目があった。国家が人間を見る目でないものがあった。転向云々の「冬枯れ」は、大事な作品である。戦後作品「にがい唾」「白い道」等との関係において無くてはならない作品であろう。戦争が人間を変え、その実例をそれらの作品に見ることが出来る。また「日本人サトウ」の問いかけに、我々は何と答えるべきか。

二十一世紀へ向けての必読の書、徳永直の作品を詳らかに読もう。
本の紹介 徳永直集(1)(2) (日本プロレタリア文学集、新日本出版社 各二八〇〇円) 所収作品(抄) (1)馬、戦争雑記、あまり者、眼、麦の芽、能率委員会、「赤い恋」以上、赤旗びらき、戦列への道、太陽のない街ほか。(2)黎明期、最初の記憶、他人の中、飛行機小僧、女の産地、梶川ツルの死、島原女、工場新聞、山一製糸工場ほか。
 (中村)

第二十四回孟宗忌御案内

二月十二日(月)午後二時～二時半

徳永直文学碑前(立田山麓泰勝寺入口)

偲ぶ会

午後三時～五時

熊大東側御食事処まさ

会費三千円

二一世紀には新しい政治を

木庭 克敏

新聞でテレビで、最高の教育をうけ、秀才のほまれの高い学者先生、政治評論家先生達が発言しているのを見聞きして、しらけた気分になるのをどうする事も出来ない。

彼等曰く「規制を撤廃しろ」「IT産業に比重を移せ」「実行力のある政治家を抜擢しろ」そうすれば必ず現在の政治経済状況を克服する事が出来ると言うのである。果たして彼等の言う微温的で改良的な方策で物事が解決するであろうか。

私は否だと言わざるを得ない。それはあたかも第五期の癌患者に奮薬をはるとか、湿布をするとかと言う様なものである。二一世紀こそ私は鋭利なメスでもって癌の病巣を剔出しなければならぬ時代だと思ふ。それは安保条約を破棄してアメリカと同等の立場に立ち、日本独占資本等の大金持と持ちつ持たれつする関係をきっぱりと絶つ時代である。

現にこの二つの事を主張する政党は確実に存在し、人々の間に影響をひろめつつある。二一世紀のなるたけ早い時期に日本を完全独立させ、大金持より庶民の方に顔を向ける政権をたち上げる必要がある。それによつてこそ現在の危機は根本的に解決出来るのではないだろうか。

日本は侵略戦争を反省したか

沢田博行

映画「ビューティフルライフ」を見た。この映画はナチスによる、ユダヤ人の強制連行と虐待がテーマである。映画を作成したのは、

米国だと思ふが欧米では、まだまだナチスによつて受けた傷あとが癒えていないという事だろう。

ドイツでは、第二次世界大戦の時の反省から、集団行動につながるような教育は一切排除し、運動会などでは行なわなくなった。また、ドイツには、「人道にもとる罪」には、時効を適用しないという法律があり、今だにナチスの残党は捜し出されて、裁判にかけられている。

それと比べて同じ戦争犯罪国家日本は、戦争の反省を全くしていない。運動会では、北朝鮮と同じように、国威発揚の為のマスクゲームが行なわれ、元七三一部隊の隊員は、人体実験で得たデータをもとに、医学や製薬会社で重要なポストについていた。そして日本の経済的發展はA級戦犯によつて支えられてきた。

そればかりではない。最近の日本は、戦前・戦中の日本を美化することに一生懸命である。例えば、東條英機を美化する映画「ブライド」がつくられたり、東條の養女による本が出版されたりしている。

中でも悪質なのは、「六千人の命のピザ」で有名な杉原千畝氏に対する、誹謗・中傷運動である。杉原氏は、戦時中日本の外務省の命令に背むいて、ユダヤ人の為にピザを発行したが、その事が原因で戦後外務省を職首になっている。しかし、最近、杉原氏は外務省の命令でピザを発行しており、杉原氏は手がらを一人じめしようとしているなどという、誹謗・中傷が行なわれているのである。

これは、何でも戦時中の日本が人道的だったと、美化しようとするものに他ならない。思えば、戦後の日本はドイツと違って、日本の侵略行為を美化することにのみ、狂奔してきた。戦争に対する反省というものが、全くない。ドイツとは全く反対の道を歩いてきた

といえよう。そのいきついた先が、「日の丸」「君が代」の法制化なのである。

ここ数年日本は何かというところ、「国際貢献」という言葉のもとに、軍備強化を行なってきた。しかし、日本が本当に国際社会に一度たつて、本当に貢献したことがあるだろうか。この言葉はまるで、戦前日本が「大東亜共栄圏」の名の元に、侵略行為を行なってきたのと同じである。

これは、東京裁判が日本に甘すぎたせいもある。東京裁判で、もっと戦争犯罪に対して、厳しい処断を行なっていれば、こんな事はなかったかもしれない。そして、南京虐殺や、従軍慰安婦の強制連行などの犯罪を徹底的に裁いていけば、これらの問題を五十年以上日本がひきずることもなかっただろう。おかげで、とうとう日本は自分達の戦争犯罪を一度も反省することがなかったのである。

会費納入者(順不同)

一木和世	井上栄次	岩本 税	植村勝明	浦田義和
大橋三千代	緒方直臣	大木綾子	金野文彦	海津広子
久保田義夫	久保整子	工藤敬一	木庭克敏	上妻四郎
吉良 初	佐田恭子	柴田徳義	坂口隆範	坂本美津子
大友清子	沢田博行	瀬口賢一	高光協三	平晋一郎
千葉昌秋	鶴田康巳	寺田 正	鳥居正純	柘植周子
高田隆子	中田幸作	永田日出男	中村青史	西村真吉
原 秀子	東啓一郎	藤森司郎	藤掛哲夫	宮崎政喜
西田光子	福島明子	宮崎静夫	三沢幹子	宮内俊介
光岡達之	益子 薫	森上是子	丸山幸子	弥上是子
吉岡恭子	吉田精一	米原尋子	渡辺英利	藤本憲信
池田義一	寺沢孝子	杉野健一	熊懷友春	鶴田文史

宮崎啓子	泉 流	松本 修	三吉輝史	尾脇蒼子
市野亨子	内野きみ子	大我 孝	菊川有臣	清原邦彦
高光睦子	寺岡 葵	永田満徳	林田幸子	平野正憲
御村春子	吉永惟昭			

遠い日の父

米原 尋子

父が脳卒中で亡くなったのは倒れて十日目で、四月八日、葬儀の日はお釈迦様の花の日であった。

文字通り春らんまんその日、田園は新緑と花に満ち、自然界はいのちのエネルギーにわきたつかのようであった。火葬場は小高い丘の上であり、道筋の両脇に植えられた桜は花吹雪となって降り注いできた。

天上を仰げば、淡い紅色をにじませた花びらの海である。風に誘われるままに、花は幾重もの波となつて流れていく。

私は花の波の間を、小躍りするかのような足取りで去っていく父の姿をはつきりと見た、と思つた。父は酒にでも酔つたように笑顔を見せていた。しかもその表情には、私が見たこともないような愉悦があふれていたのである。

台湾紀行雑詠

中村 青史

硯石求めて川原さまよひし宗不旱のむかし濁水の川

台湾の山峡の地にわれ見たり植民地時代の苦渋のあとを

霧社に来てわれ見てとりぬ憎愛の表情交々過ぐる高砂の人
そのむかし日本軍隊上陸地いま台湾第四原発建設地となる

遠目には紺青の海近づけば岩に緑なき台湾第一原発

事務局だより

▽徳永直の作品に「彼岸」という作品がある。トシヲ夫人の祖母がモデルのヨシ婆さんの物語である。宮城県登米郡登米町やそこを流れる北上川が主舞台となっている。東京の孫娘夫婦の所にもしばらく寄寓するが、都会の空気になじまず帰郷する。最後は自分の下着か何かを洗うために、北上川の岸辺へ行き、足をすべらして川に落ちて死ぬ。この死の様は、国木田独歩の「窮死」の文公の死に方と似ている。どうにもこうにもやりきれなくところが落ちた感じである。高齢化社会の老人問題を作品化した草分け的作品である。

▽作品を読みたくても読めない、との苦情は山ほどある。何とかせねばとさせる。著作権の問題もある。私も日本著作権協議会会友であるが、私などは著作権を主張する元の著作そのものが極く乏しいので問題でもない。しかし著作権は尊重されねばならないと思う。そう思う反面、著作権なるものを邪魔だと思ふこともしばしばである。この矛盾した思いを解決できないでいる。

▽ラファデオ・ハーンは、「不揃い」という点に日本独特の美を発見した。ハーンの時代までは、西洋の美は均整のとれた、いわゆるきちんと釣り合いのとれたものであった。日本人はわざとバランスを崩したところに美を見出そうとした。これは角度を変えて見れば、自然体なのではなかったのか。大自然の諸形態は、必ずしもきちんとは均整のとれたものではない。型にはまらないのが自然なのだ。今どきの教育も、その辺の基本に戻って考えてみる必要もあろう。直の「八年制」という小説も参考になるだろう。

▽事務局としてはより多くの人々が会員になってもらいたいということ。それが一番。(中村)

2000年1月～12月 収支

収 入		支 出	
会費納入(次年度分)	299,000	事務所家賃	180,000
前年度繰越	119,570	通信費	83,573
		事務用品費	8,854
		会報印刷	48,300
		会報宗	11,425
		雑費	800
		次年度繰越	85,618
合計	418,570	合計	418,570
		※ 現金	77,782
		預金	58,366
			25,678

上記に相違ありません。
4/12年1月8日

会計監査

西岡光子
半原存子

熊本・徳永直の会
熊本市北千反畑町五―二三 さろん・ど・漱雲
〒860-0855 TEL・FAX〇九六―三四三―〇〇七二
郵便振替 〇一九四〇―二一―一四九八

印刷所 (株)昭和印刷 三四四―五二五二・三四三―三八八六